

(続紙 1)

| | | | |
|---|--|----|-------|
| 京都大学 | 博士 (人間健康科学) | 氏名 | 奥本 綾香 |
| 論文題目 | The relationship between hospital ethical climate and continuing education in nursing ethics (病院の倫理的風土と看護倫理に関する継続教育の関係について) | | |
| (論文内容の要旨) | | | |
| <p>これまで行ってきた病棟看護師の離床センサーに対する認識についての研究より、看護師の倫理的な認識に影響を与える要因として、病院の倫理的風土が存在するのではないかという作業仮説をたてた。</p> <p>倫理的風土は、組織風土の重要な側面の一つであり、これまでも、看護師らの行動に影響を及ぼし、職務満足度や離職意図、倫理的ストレス、道徳的な悩み、ケアの質との関連等が報告されている。しかしながら、倫理的風土と看護師への倫理教育についての関係は十分に明らかになっていない。</p> <p>本研究は、看護師の捉える倫理的風土と倫理教育の関係を明らかにすることを目的とする。この結果、倫理的風土向上のための効果的な教育機会の解明の一端となる可能性が期待される。</p> <p>本研究の一環として、倫理的風土を測定する尺度(HECS)の日本語版(J-HECS26、以下「本尺度」)開発研究を副論文として報告した。主論文では、本尺度を使用し、大学病院に勤務する看護師の倫理的風土の認識を解析した。</p> <p>研究は、研究承諾の得られた3つの大学病院に対し、2168枚の質問紙を配布、770枚を郵送または院内書留式にて回収する方法で行った(回収率35.5%)。そのうち尺度部分に欠損のない605枚を解析対象とした。また倫理教育受講歴を「倫理に関する院内研修及び院内勉強会(院内倫理研修)」群、「倫理に関する院外研修及び学会(院外倫理教育)」群に分け、重回帰分析及び共分散分析にて解析した。実施に際しては、京都大学大学院医の倫理委員会の承認を受けた。</p> <p>回答者の属性としては44名(7.2%)が男性、565名(92.8%)が女性であった。平均年齢は31.4歳、平均の臨床経験年数は8.4年であった。クロンバックα係数は本尺度全体で0.94、下位因子は0.67-0.95であった。本尺度項目の平均得点は3.65\pm0.57点であった。また下位因子の平均得点は上司:3.75、医師:3.30、病院:3.49、患者:3.80、同僚:4.08であった。個人属性とJ-HECS26の関連については、性別(p=0.042)、所属する病院(p<0.001)、所属する診療科(p<0.001)、倫理教育の受講歴(ある>なし、p=0.035)、院内倫理研修の受講歴(ある>なし、p<0.001)、院外倫理教育の受講歴(ある<なし、p=0.023)において統計学的に有意な差があった。</p> <p>重回帰分析において、経験年数の長い看護師が倫理的風土を低く認識する傾向が明らかになり、師長や女性は高く認識していた。また、所属する病院や診療科は、本尺度得点に対して有意に関連していた。</p> | | | |

個人属性を調整し、倫理研修受講歴あり群となし群で本尺度得点を比較したところ、院内倫理研修受講歴あり群がなし群よりも2.63点高かった(p=0.038, ANCOVA)が、院外倫理教育受講歴あり群となし群の比較では、なし群が3.30点高かった(p=0.033, ANCOVA)。

これらの結果より、看護師の倫理的風土に対する認識は、職場環境や経験年数に影響されると共に、院内倫理研修受講者で高く、院外倫理教育受講者で低かった。倫理的知識や倫理感受性の比較的高い層が、組織の倫理的風土を低いと評価する可能性もあり、組織の倫理的風土の向上には、院内倫理研修の充実と、院外倫理教育で得られた学びの共有を図ることが重要であり、看護師の倫理的実践を形成する基盤構築へと繋がると考える。

(論文審査の結果の要旨)

倫理的風土は、組織風土の重要な側面の一つであるが、倫理的風土と看護師への倫理教育との関係は十分に明らかになっていない。本研究は、看護師の捉える倫理的風土と倫理教育の関係を明らかにすることを目的とする。本研究の一環として、倫理的風土を測定する尺度(HECS26)の日本語版(J-HECS26、以下「本尺度」)開発研究を副論文として報告した。主論文では、本尺度を使用し、大学病院に勤務する看護師605名の倫理的風土の認識を解析した。重回帰分析において、経験年数が長い看護師が倫理的風土を低く認識する傾向が明らかになり、所属する病院や診療科は、本尺度得点と有意に関連していた。個人属性を調整し、倫理院内教育あり群が、院内教育なし群よりも高かった(p=0.038, ANCOVA)が、倫理院外教育あり群は、院外教育なし群より低かった(p=0.033, ANCOVA)。

看護師の倫理的風土に対する認識は、職場環境や経験年数に影響されると共に、院内倫理研修受講者に高く、院外倫理教育受講者に低かった。倫理的知識や倫理感受性が比較的高い層が、組織の倫理風土を低いと評価する可能性もあり、組織の倫理的風土の向上には、院内倫理研修の充実と、院外倫理教育で得られた学びの共有を図ることにより、看護師の倫理的実践を形成する基盤構築に繋がると考える。

以上の研究は、看護師の倫理的風土の認識の実態と継続的看護倫理教育の関連を明らかにした重要な研究であり、看護管理学の発展に寄与する。

したがって、本論文は博士(人間健康科学)の学位論文として価値あるものと認める。

なお、本学位授与申請者は、令和4年12月2日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。